

動詞の意味と構文の拡張 (2)

浅川 照夫

はじめに

前稿では、これまで議論されてきた動詞交替構文が「構文発生期」から「構文拡張期」、「構文再拡張期」の三段階を経て発生・拡張したものであり、結果的に、基本形から特殊形へと階層的に配列されている下位構文の複合体であること、そして動詞の意味と構文の意味の関係はこの三段階を明確に区別して論じる必要があることを主張した。具体例として二重目的語構文を取り上げ、拡張三段階説に基づく新しい構文ネットワークを提唱した。主な主張は、「構文発生期」に軽動詞 *give* を基に二重目的語構文が形成され、*give* との意味的類似性に基づいて動詞 *pass*, *hand* へと動詞類が拡大、次いで「構文拡張期」において「力学的関係の仮説」に依拠して動詞 *throw*, *send*, *bring* 類へ拡張し、最終段階の「構文再拡張期」において力学的関係によらない動詞 *buy* 類へと拡張する、というものであった。本稿では、更に奪取構文と *Spray/Load* 構文について検討し、動詞の意味と構文の意味の関係を探る。

1 奪取構文

奪取構文とは、[Verb+NP1+of+NP2] の連鎖から成り、NP1 から NP2 を奪い取るという意味の次のような文を指す。

(1) They also robbed two schoolboys of their £250 mountain bikes. (BNC)

(2) Wells cheated me of all but one child. (BNC)

一般に NP1 には人間またはそれに準じるもの、NP2 には NP1 にとって重要な意味を持つ品物が現れる。Goldberg (1995:45-48) によると、奪取構文はフレーム意味 <robber victim goods> を持つ。つまり、NP1 は NP2 を奪われた場合、多少なりとも被害者としての感情を抱くものである。

(3)a. John robbed him of his last penny/*a penny.

b. I robbed him of his pride/his livelihood/his nationality. (Goldberg 1995:46)

(4) John cheated me of a diamond/??a pebble stone.

本節では、Levin (1993) が指摘した奪取構文の動詞群を再検討し、奪取構文に現れる動詞類を形式と意味の両面から限定していく。それによって奪取構文の拡張プロセスが自ずと明らかになり、本稿の三段階説に合致することを示す。

1.1 Levin (1993)

Levin (1993 : 129) に、この構文に生起できる動詞が40数個アルファベット順にリスト・アップされており、以下の3点が共通の統語的特長として挙げられている。⁽¹⁾ (A) Locative Alternation ができない : *The doctor cured pneumonia from Pat. | The doctor cured Pat of pneumonia. (B) Causative Alternation ができない : *Pat cured of pneumonia. (C) 動詞によっては of 句を out of 句に交替できる : The swindler cheated Pat of/out of her fortune. | The doctor cured Pat of/*out of pneumonia.

しかし、これだけの特徴で奪取構文に現れるすべての動詞をまとめ上げるあげることにはできない。例えば、リストの中にある動詞 milk は (A) の交替を許す。

(6)a. She milked the company of a small fortune.

b. She milked a small fortune from the company over the years. (OALD 7th edition)

また、動詞 swindle に至っては、奪取構文に特有の of 句を取らず、代わりに out of 句を伴いながら (A) の交替を許している。

(7) *John swindled me of \$2,000.

(8)a. A City businessman who swindled investors out of millions of pounds to finance his search for a perfect gambling system was jailed for four years. (BNC)

b. They swindled hundreds of dollars out of him. (OALD 7th edition).

Levin のリストは、[NP1 + of + NP2] を厳密下位範疇化し、かつ「除去・剥奪」の意味を持つ動詞を意味を考慮せずに単に列挙しただけにすぎないものである。奪取構文は「除去・剥奪による被害」という特別な意味の一面を持つが、この観点からリストにある動詞を眺めてみると、動詞 cleanse, purify などは全く逆の意味を持つだけに、rob や cheat と同じ類に入っていることに非常に違和感を覚える。動詞 free, exonerate の場合も同じで、責め苦からの「開放」というポジティブな意味を表している。

(9) Woman is freed of/from her basic responsibility of bringing up children.

(10) He was totally exonerated of any blame. (LDCE)

次の動詞 purge, void では目的語が有生名詞ではないし、意味も単なる「除去」を表していて、それ以上の含意はない。

(11) His dreams are innocent, purged of menace and sickness. (BNC)

(12) <to void a chamber of occupants> (Dictionary.com)

1.2 動詞分類

Levin の動詞リストは意味的に見れば、奪取、開放、除去の動詞に大別できる。リストの動詞群は [V + NP1 + of + NP2] の形式に生じて NP2 の除去・剥奪を意味する点で共通しているが、以

下に見るように、それぞれの意味に特徴的な統語形式が備わっているので、より広範囲な統語形式と意味に準じて整理し直す必要がある。

Levin のリストを奪取、開放、除去の意味基準と次の 5 つの統語形式のどれを取るかという統語規準に照らして細分類してみる。

- [1] [Verb + NP1 + OF + NP2]: ex. John robbed her of \$2,000.
- [2] [Verb + NP1 + OUT OF + NP2]: ex. John cheated her out of \$2,000.
- [3] [Verb + NP1 + FROM + NP2]: ex. John freed her from all her debts.
- [4] [Verb + NP2 + OUT OF + NP1]: ex. John swindled \$2,000 out of her.
- [5] [Verb + NP2 + FROM + NP1]: ex. John milked a fortune from her.

使用頻度からすると、リストの動詞は、奪取の Deprive 類と Cheat 類、開放の Free 類の三つが中核となっている。これらは奪取構文の基本形式 [1] のうち前置詞 of が他の前置詞に交替できるかどうかによって区別される。Deprive 類では of のみが可能で、この of が Cheat 類では out of に、Free 類では from に交替可能となる。三つとも [4]、[5] の形式は認めない。

- (13)a. John robbed Mary of \$2,000. (*out of, *from)
- b. John cheated Mary of/out of \$2,000. (*from)
- c. John freed Mary of/from all her debts. (*out of)
- d. *John robbed \$2,000 of/out of/from Mary.
- e. *John cheated \$2,000 of/out of/from Mary.
- f. *John freed all debts of/from her.

除去を表す Purge 類の動詞は、Levin の挙げた特徴 (A) とは裏腹に [1] と [5] の形式で交替する。これは、どちらかということ、clear, empty 等の Clear 類動詞の構文が持つ特徴である。

- (14)a. Doug cleared the table of dishes.
- b. Doug cleared dishes from the table. (Levin 1993:124)
- (15)a. His dreams are innocent, purged of menace and sickness. (BNC)
- b. The conservative viewpoint has been purged from the faculties of virtually every major university (The Nation, March 21, 2002)

Swindle 類の動詞は (7) に示したように of 句を取らないのが最大の特徴である。意味的には Cheat 類と同じであるが、次の二種類の目的語を取れる点で異なっている。

- (16)a. John swindled/cheated Mary.
- b. John swindled/*cheated \$20.

(16b) の目的語が容認されるために、Cheat 類と違って、目的語交替の形式 [4]、[5] が可能になっている。(8) および 1.5 節参照。

以上をまとめると、次のようになる。⁽²⁾

I. 奪取

a. Deprive類 (deprive, rob, rid, bereave, denude, divest, strip, dispossess, burglarize, despoil, disarm, plunder, milk, mulct, unburden): [1].

(17) His descriptions of the rooms and landscapes, of friends, even of lovers, are bereft of sensuality or physicality. (The Nation, March 20, 2000)

(18) He intends to divest you of all your power. (BNC)

(19) The state fails to provide them with adequate education, healthcare or sanitation; more actively, it works to dispossess them of their land and resources. (The Nation, July 16, 2007)

(20) This policy has been a political and economic failure, leaving the country denuded of skilled labor and incapable of meeting its basic needs. (The Nation, April 17, 2000)

b. Cheat類 (cheat, defraud, bilk, fleece, rook, balk, deceive, beguile): [1] and [2].

(21) …, having misled and defrauded buyers of more than \$2.1 billion in risky municipal securities, … (The Nation, Jan. 22, 2002)

(22) One of my fiercer relatives, bilked of five hundred quid when a client was bankrupted, also claims that the bailiffs we have are useless. (BNC)

(23) After all, analysts figure that A.D.M. cheated its lysine customers alone out of more than \$170 million. (The Nation, April 7, 1997)

(24) A SWINDLER who fleeced banks out of £2.2 million was jailed for four years yesterday. (BNC)

(25) Lay and his cohorts cooked the books, cashed out more than \$1 billion in holdings and bilked hundreds of thousands of small investors out of their savings. (The Nation, June 25, 2007)

(26)a. a disease that has beguiled me of strength. (AHD)

b. being offended in that he is beguiled of what he hoped for, … (DGC, Heliodorous 1923)

(27) <deceived me of a good sum of money> (Webster's Third)

(28) beguile a person (out) of his rights (小学館ランダムハウス英語辞典)

c. Swindle類 (swindle, trick, con, do, gull, bamboozle): [2], [4] and [5].

(29) American Bakker conned followers out of £100 million. (BNC)

(30) [They] wondered at the acrobatics with which these little adventurers conned money out of financiers for some gadget or tip. (DGC, The seventh well, 1976)

(31) But, she reminded herself, he still despised her because she was a fortune-hunter who had conned the family jewels from his innocent kid brother… (BNC)

II. 開放

- a. Free 類 (free, cleanse, cure⁽³⁾, ease, relieve, exonerate, disabuse, disencumber, purify, wean, absolve⁽⁴⁾, acquit): [1] and [3].

(32)a. But this alone will not purify your water of waste products that are invisible to the eye.
(BNC)

- b. If we confess our sins, he is faithful and just and will forgive us our sins and purify us from all unrighteousness. (BNC)

(33)a. he has healed not only my drug problem but has cleansed me from sin so that I feel clean.
(BNC)

- b. The Great Rebellion can be regarded in part as an anti-witchcraft movement, like those which sweep through traditional African societies in a utopian quest for a new world cleansed of sin and hatred. (BNC)

III. 除去

- a. Purge 類 (purge, void): [1] and [5]

奪取構文を扱う際に問題となるのは、形式 [1] の構文をことごとく奪取構文としてまとめてしまっても良いかどうか、という点である。Deprive 類と Cheat 類が同じ奪取構文に属するのは間違いのないとしても、Ⅲの除去動詞については、上で見たように Clear 類の動詞に入れて論じるのが自然であり、奪取構文からは除外して然るべきである。Free 類の場合には、Deprive 類・Cheat 類の of 句と Free 類の of 句とが同一であるかどうか、という問題が残る。ここでは異なる可能性を示唆しておきたい。前者の of は「分離・剥奪」の意味で、同じ意味の out of を除いて他の前置詞で代用することは出来ない。Tyler and Evans 2003、Lindstromberg 1998 参照。しかし、後者の of は from と交替できることから、「起源」を表す of と考えることができる。⁽⁵⁾ 起源の of は、以下に示すように、from と自由に交替できるのである。

(34)a. You shouldn't expect too much of/from us.

- b. He is a man of/from Belfast.

基の位置から離れていく意味が、所有関係の場合には、分離・剥奪の意味にメタフォリカルに転化する。前置詞 of に関するこの事実は、たとえ同じ構文形式を取っていても、奪取動詞と開放動詞では異なる構文として扱ったほうがよいことを示している。

各類共にそれぞれ特有の意味と形式を備えており、緻密な事実調査をした上でなければ、すべてを関連付けて網羅的に論じることはできない。本稿では、上記のうち、奪取動詞の Deprive 類、Cheat 類の奪取構文について、その意味と拡張を論じることとする。これらは奪取構文の中でも基本的な構文類であり、これらの関連性が明らかになれば、他の類について検討する際の手がかりが

得られるであろうと思われる。

1.3 使役連鎖

Deprive 類と Cheat 類の大きな意味の違いは、前者が力を行行使して相手から所有物を奪い取って所有移動を成就させるのに対し、後者は直接行動というより弁舌巧みに相手をだますなどの間接的行為によって所有移動を成功させている点である。次のパラフレーズ関係は、Cheat 類動詞が奪取の手段の意味を担っていることを示している。

(35) *John took a diamond from me by means of robbing/depriving.

(36) John took a diamond from me by means of cheating/deceiving (me).

奪取構文に生じる動詞を Deprive 類と Cheat 類に分けて考えてみると、前稿で見た二重目的語構文の場合と同じく、明らかにこの構文内に使役連鎖の関係が存在していることが分かる。本稿の拡張三段階説によって、この構文の発生と拡張のプロセスを説明する用意が整ったと言えよう。ただ、次の点を断っておきたい。この構文は英語の中では難度の高い動詞を使用しているため、二重目的語構文のように幼児期の早い段階から習得のプロセスに入るわけではない。そのため、どの時期にどの動詞から習得されるかといった詳細なデータ報告はないと思われ、たとえあったとしても、残念ながら、今のところ入手できない。

まず、英文法内に奪取構文が生まれる「構文発生期」であるが、この構文で最も使用頻度の高い基本動詞 **rob** から奪取構文の意味と形式が成立すると仮定して差し支えないであろう。**rob** を基本動詞と仮定した場合、**rob** の意味からどのように他の動詞へ拡張していくのか説明しなければならない。三段階説の可能性として、①「構文発生期」における意味的に類似した動詞への拡大（例えば、二重目的語構文における動詞 **give** から **pass**, **hand** への拡大）、②「構文拡張期」における「力学的関係」による原因、手段を示す動詞への拡張（例えば、二重目的語構文における動詞 **throw**, **bring** への拡張、移動構文における動詞 **screech** への拡張、結果構文における動詞 **sneeze** への拡張）の二つがある。Deprive 類の動詞には使用頻度の極めて低い特殊な単語が並んでいるが、これらは習得されると同時に、基本動詞 **rob** との意味的類似から奪取構文に生起できると仮定できる。つまり①による動詞拡大で、動詞 **xerox** が新語として登場するや、二重目的語構文に使用されるのと同じ原理である。

ところで、Deprive 類の動詞は所有移動という視点から見ると、動詞 **lose** の二重目的語構文と類似している。⁶⁾ 前稿で見たように、二重目的語構文(37)は、過失が何らかの原因となって、これまで所有していた財産を失うという意味である。

(37)a. The mistake_i lost him_j his fortune_k.

b. [prior to t(0), R(j, k)] ∧ [at t(0), M[ACT(i), ~R(j, k)]]

Deprive 類の動詞は「剥奪」を意味する点ではすべて共通しているが、剥奪後に物の所有が剥奪行

為者に移るかどうかに関しては移る場合と移らない場合とがある。動詞 *rob*, *deprive* は ‘to take money or property from a person illegally’ の意味で、前置詞句に金銭や品物が生じると、通常は、奪われた品物は略奪行為者の手に移る。

(38) #John robbed/deprived Mary of \$2,000, and he didn't get it.

しかし、次のように抽象名詞が生じれば、所有移動は問題にならない。

(39) By daring to torture unapologetically and out in the open, Bush has robbed everyone of plausible deniability. (The Nation, Dec 26, 2005)

動詞 *rid*, *divest* などは ‘to free a person of something unwanted’ の意味で、前置詞句の目的語が何であれ、剥奪後の所有移動には関与していない。

(40)a. John rid me of this troublesome boat, and Mary owned it.

b. It is difficult to rid them of the smell of onions.

所有移動は動詞の意味の問題ではなく、奪取行為からの含意のひとつに過ぎないと考えることもできるが、その場合は *Deprive* 類を細分類する必要はない。しかし、物を剥奪する意味の (38) と (40a) を比べると明らかに所有移動に違いがあるので、ここでは所有移動を奪取動詞の prototypical な意味であると仮定し、前稿の表記上の規約に従って、奪取構 $[NP_i V NP_j \text{ of } NP_k]$ について、所有移動を含むかどうかによって、*Deprive* 類を *Rob* 類と *Rid* 類の二つに分け、以下のように区別しておくことにする。

Deprive 類

(i) Rob類: *rob*, *deprive*

$[\text{prior to } t(0), R(j, k)] \wedge [\text{at } t(0), \text{ACT}(i)] \wedge [\text{at } t(0), M[\text{ACT}(i), \sim R(j, k)]] \wedge [\text{at } t(0), M[\text{ACT}(i), R(i, k)]]$

(ii) Rid類: *rid*, *divest*, *denude*, *bereave*, …

$[\text{prior to } t(0), R(j, k)] \wedge [\text{at } t(0), \text{ACT}(i) \wedge M[\text{ACT}(i), \sim R(j, k)]]$

$M[\text{ACT}(i), \sim R(j, k)]$ が剥奪、 $M[\text{ACT}(i), R(i, k)]$ が所有移動を表す。もちろん、基本的に *Rob* 類の動詞であっても、NP1 と NP2 との意味関係によって *Rid* 類に転換するので、上の区別は個々の動詞に絶対的なものではない。例えば、NP *deprived him of a gold medal/the crown*. (差読者の指摘による) の場合、物理的な所有の移動はない。けれども、名誉や権力を授与者側に返還するという所有権の移動が考えられるので、どの類に属するかは微妙な判断を迫られる難しい問題である。

Rob 類と *Rid* 類の関係は上記①で捉えられる動詞の拡大である。*Rob* 類と *Cheat* 類は、一見したところ意味が異なるので、*Rob* 類から *Cheat* 類への拡張を②によるものと単純に仮定してよさそうだが、そうとばかりも言えない。奪取構文に特徴的な金銭を奪うという行為は反社会的な行為であっ

て、従って、物の略奪と関係ある否定的な意味合いを持つ動詞なら何でも奪取構文の手段となれる可能性があるが、この構文は人をだますという不誠実で違法な行為だけを許している。次に示すように、使役連鎖の手段や原因を表わす動詞ならば何でも生起できるという訳ではなく、奪取行為の手段は Cheat 類の意味から外れてはならないのである。

(41) *John beat/killed/intimidated her of \$2,000.

殴ったり、殺したり、脅したりして金品をまきあげるのは世間でよく耳にすることであるが、言語的には明らかにそのような行為と奪取行為は無関係のものと認識されている。なぜ Rob 類から Cheat 類へと拡張するのか、その理由を考えてみたい。

Cheat 類の動詞の意味を詳細に検討してみると、二種類に更に分類できる。動詞 cheat の仲間は、各種辞書の定義によると、人を欺くという意味のほか、Rob 類の動詞の基本的意味 ‘take something away from someone’ を含意していることが明白である。⁷⁾

CHEAT: ‘to act in a way that is dishonest, or to make (someone) believe something that is not true in order to get something for yourself’ in CDAE, ‘deprive of something by deceitful or unfair means’ in COED

DEFRAUD: ‘to take or keep something illegally from (someone) by deceiving them’ in CDAE, ‘illegally obtain money from (someone) by deception’ in COED

BILK: ‘obtain (money) fraudulently’ in COED, ‘to cheat out of something valuable’ in WOD

FLEECE: ‘to strip of money or property by fraud or extortion’ in WOD

ROOK: ‘to cheat someone out of some money’ in CALD

それに対して、動詞 deceive は人を欺くという意味だけで、物を奪うという意味までは含意していない。⁸⁾

DECEIVE: ‘to persuade (someone) that something false is the truth’ in CDAE

次の二つの例文は意味の整合性に違いがある。

(42)a. #John cheated/defrauded the taxman with no intention to benefit from it.

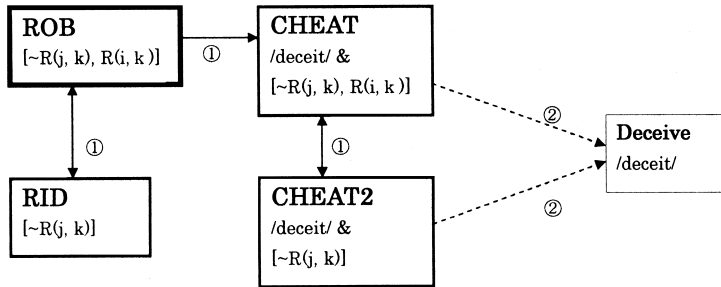
b. John deceived the taxman with no intention to benefit from it.

Cheat 類の動詞が奪取構文に生じた場合、剥奪後に所有移動を含意するケースが多いが、常にそうとは限らないことは Rob 類と同じである。次の例文を参照。

(43) In the event of a mistrial, Libby’s lawyers would likely claim their client had been cheated of exoneration by the jury.

さて、奪取構文には Rob 類、Rid 類、Cheat 類、Deceive 類の 4 種類があることが分かった。生起する動詞群はそれぞれ微妙に意味が異なっているが、しかし、人から物を剥奪するという構文の意味は共通している。Rob 類は「奪取・所有移動」、Rid 類は「奪取」、Cheat 類は「欺瞞・奪取・所有移動」、Deceive 類は「欺瞞・奪取」の意味である。一見ばらばらようであるが、奪取構文は

「構文発生期」において Rob 類の動詞の意味「奪取・所有移動」を基に形成され、同じ意味「奪取」を共有する Rid 類、Cheat 類へと動詞の第一次拡張が行われ、次いで、Cheat 類の意味の一部を継承して Deceive 類の動詞が生起するという拡張プロセスを仮定すれば、拡張ラインの中に 4 つの動詞類を関連付けて位置づけることができる。



[図 1]

Cheat 類は /deceit/ の意味に加え、Rob/Rid 類の /deprivation/([~R(j, k)]) の意味も合わせ持つので、奪取構文の形式と意味が形成されれば、自動的に奪取構文に生起できるようになる。これは上の①に相当する。基本動詞の意味を継承した動詞の拡大は、二重目的語構文の動詞 give (「所有移動」) から pass, hand (「所有移動プラス移動状態」) への拡大にも見られたことである。Cheat 類は所有移動を含意しないこともあるので、図 1 ではそれらを Cheat2 としている。

Cheat 類の奪取構文は動詞の /deceit/ の意味が物を奪う手段の役割を担っている。これが上の②に述べた「力学的関係の仮説」に基づく Deceive 類への拡張を加勢している。動詞 deceive は欺瞞の意味しかないが、奪取構文に生じて始めて剥奪の意味を持ちうる。前稿の二重目的語構文の拡張でも指摘したことであるが、構文拡張が最小の変化で漸次的に経過していくと、最終的に基本構文からは非常に意味がかけ離れた構文が発生する可能性がある。奪取構文の場合にもこれが当てはまっており、Rob 類と Deceive 類では動詞の意味が全く異なるけれども、Cheat 類を間に挟むと、自然な形で拡張のラインに載ることができるのである。

1.4 拡張阻害の構造的要因

(41) が非文であるのは、奪取構文における動詞拡張が基体になる動詞の意味を継承しなければならないという制約が働いているためである。従って、rob から cheat、deceive への拡張は自然に経過するけれども、deceive から先の動詞拡張はないことが予測できる。まして、様態等の「構文再拡張期」へと動詞を拡大することはできない。

(44) *John kissed/whispered me of \$2,000.

ここで、断っておかなければならないことがある。Deceive 類の動詞は、そもそも Levin のリストにはなかった動詞である。Webster's Third は deceive の奪取構文は obsolete として、OED からの例 (27) を引用している。確かに、インターネットや各種の corpus を調べても、deceive の奪取構文の20世紀以降の新しい例は見当たらなかった。(27) は1761年の例であるが、次はもう少し新しく、19世紀までは英米で使用されていたと思われる。

(45) Arriving there, he was not deceived of his expectation. (DGC, Collections of the Massachusetts Historical Society, 1832)

本稿の主張では Deceive 類の奪取構文は拡張が進んだ派生的な構文に位置することになるので、従って、使用頻度が低く、用法が廃れたりするのは、本稿の説明と合致し矛盾するものではない。ただ、現代において Deceive 類の奪取構文がもはや使用されなくなったとすれば、図1の Cheat 類から Deceive 類への拡張はなくなるので、奪取構文は「構文発生期」に留まる構文で、「構文拡張期」以降の拡張はないと言うことができる。そうすると、冒頭に述べた基体動詞の意味を継承する動詞のみがこの構文に生じるということが当然の帰結となる。

動詞の拡張が進まない理由は、その形式面の特徴にあると思われる。三段階すべてにわたって動詞が多岐に渡る構文を見てみると、際立った構造的特徴があることに気づく。様態移動構文 (NP V [P NP]) と One's Way 構文 (NP V one's way [P NP]) は前置詞句が into, out of など起点、着点を持つ移動を表す前置詞句に制限されているので、動詞の意味に全面的に頼らなくても構文の意味の一部を部分的に推論することができる。⁹⁾ 明らかに、前置詞句がこの種の構文にとって動詞と同じように重要な役割を果たしているのである。

(46)a. The bottle floated into/*in the cave.

b. He dug his way out of /*in the prison.

二重目的語構文 [NP [V NP NP]] や形容詞結果構文 [NP [V NP AP]] にしても、[V NP NP]、[V NP AP] という他に例のない特殊な動詞句構造が構文固有の意味と一体化している。つまり、この種の構文では、構文の形式と意味が一端、文法内に定着すると、動詞以外の要素から構文の基本的なフレーム意味を間接的に把握できるようになっているのである。このように、構文の意味を理解する際に動詞の意味を直接関与させないで済むことが、構文拡張が第三期まで進んでいく大きな原因であると考えられる。

ところが、奪取構文では動詞を除く形式 [NP of NP] から、奪取の意味を導き出すことはできない。前置詞 into から移動の意味を推測できても、of 句だけで物を奪うという意味を引き出すこと無理である。of 句は Rob, Cheat 類の動詞と共に初めて奪取の意味を持ちうるのである。

1.5 out of 前置詞句

Cheat/Deceive 類の構文は of 句と out of 句を取って奪取を意味することができるが、of 句と out

of 句の違いは前置詞句からの WH 疑問文の可否によって知ることができる。調査では次の容認度の差が出たが、これが確実であれば、of 句が項 (argument)、out of 句が附加詞 (adjunct) と言ってよいだろう。

(47)a. ?What did John cheat her of?

b. *What did John cheat her out of?

つまり、of 句は奪取構文の形式をそのまま継承した前置詞句であり、out of 句は他動詞構文 John cheated me. に附加された前置詞句であると考えてよい。out of 句の意味については、Lindstromberg (1998:39) の次の説明が最も妥当なものと考えている。

The underlying conception may be that one can be ‘in’ and later ‘out of’ the state of having something rather like one can be in or out of an enclosed space.

言い換えれば、out of 句は結果構文における結果句である。John cheated Mary out of \$2,000. を例にとれば、Mary は2000ドルを持っている状態にあったが、John に騙された結果、2000ドルを持つ状態から「離れて」しまった、つまり失ってしまったという意味になる。Tyler and Evans (2003: Chapter 7) およびその邦訳版監訳者注 (pp.323-325) における landmark の観点からの議論も参照されたい。

この out of 句の出現が、たとえ of 句の奪取構文には生起しなくても、out of 句を伴って奪取の意味を表す Swindle 類のような動詞を可能にしている。

(48) John swindled Mary out of \$2,000. (*of)

Swindle 類は次の形式を取ることも特徴のひとつであるが、

(49) John swindled \$2,000 out of Mary. (from)

既に指摘したように、この out of は from と置き換えられることから、起源を表すことは明らかで、所有関係の of とは区別される。従って、John took 10 dollars away from Mary. の構文範疇の中で考察されるべきものである。

2 Spray/Load 交替現象について

周知のように、Spray/Load (以下S/L) 交替現象とは次の (a) と (b) の二つの構文の関係に当てられた名称である。

(1)a. John sprayed paint on the wall.

b. John sprayed the wall with paint

(2)a. John loaded hay onto the wagon.

b. John loaded the wagon with hay.

便宜上、(a) を POUR 構文、(b) を FILL 構文と呼んで区別する。POUR 構文はより大きな範疇の使役運動 (Caused-Motion) 構文の形式と意味に合致するので、S/L 交替動詞も使役運動動詞のひとつ

つとして扱われる。FILL 構文は、容器を物で満たしていく意味の動詞とのみ結びつく言語形式である。次の動詞群が S/L 交替現象を起こす (Pinker 1989:126-127, Goldberg 1995: 175-179)。

Slather類: slather, smear, brush, dab, daub, plaster, rub, smear

Heap類: heap, pile, stack

Spray類: spray, spatter, splash, splatter, inject, sprinkle, squirt

Cram類: cram, pack, crowd, jam, stuff

Load類: load, pack, stock

S/L 交替現象には Content-Container Frame: <agent content container> が関与している。これは行為者が道具を使って容器に内容物を入れていく場のフレーム意味で、容器の体積・面積が品物で埋められていく過程と内容物の総量が少なくなっていく過程とが同時に進行する。Content-Container frameは、容器にプロファイルが置かれると、容器が満たされていく FILL frame: <agent content container>、内容物にプロファイルが置かれると、内容物が容器に移動していく POUR frame; <agent content container> に分かれる。FILL frame か POUR frame の一方にしか生じない動詞もあるが、S/L 交替動詞はこれら二つのフレームのどちらにも対応できる意味を持ち、FILL フレームには FILL 構文 (b)、POUR フレームには POUR 構文 (a) が対応する。

次の動詞 *cram* に見られるように、S/L 交替動詞はすべて content と container の両方を下位範疇化しなければならない。

- (3)a. Pat crammed the pennies into the jar.
- b. Pat crammed the jar with pennies.
- c. *Pat crammed the pennies.
- d. *Pat crammed the jar. (Goldberg 1995)

これは、S/L 交替動詞のフレーム意味に content と container の意味役割 (participant roles) が含まれていなければならないことを意味する。このフレーム意味が言語形式化される場合、英語であれば FILL フレームまたは POUR フレームのどちらかに必ず対応する。ということは、S/L 交替動詞の場合、動詞の意味が FILL 構文と POUR 構文にそのまま反映されることになり、動詞の意味と構文の意味は一致していると言える。

前稿で見たように、様態移動構文、二重目的語構文、One's Way 構文は構文発生期から構文拡張期、再拡張期の三段階を経て、様々な種類の下位構文で構成されているひとつのネットワーク体である。それぞれ構文発生期では動詞の意味と構文の意味が同一であるため、動詞の意味役割の数と構文の項 (argument roles) の数が同じである。しかし、構文拡張期および再拡張期になると、動詞が構文の意味の一部分を担うので、通常、動詞の意味役割の数は構文のそれより少なくなる。John sneezed the napkin out of the table. を例にとると、動詞 *sneeze* は <sneezer> のみ、本体の結果構文は <agent object result> の三つの役割を持っている。この観点から S/L 交替現象の FILL 構

文を見れば、この構文は構文発生期段階に留まり、特定の意味クラスの動詞に限定されている構文だと言って差し支えない。

ただ、S/L 交替動詞が FILL 構文の手段の意味を担っていることは間違いないから、「力学的関係の仮説」によって拡張を受けた構文であるとも考えることもできる。例えば、FILL 構文の基本動詞を fill と仮定すると (ex. John filled the glass with water.)、動作の指定がないので、S/L 交替動詞が現れるには「力学的関係の仮説」が関与していなければならない、という論法になる。しかし、ここには重大な見落としがある。Goldberg (1995) の「力学的関係の仮説」は、構文の意味と動詞の意味が独立して存在しているときに、両者を結合するための条件であった。The train screeched into the station. は「きしむ」という動詞意味と「移動」の構文意味が使役連鎖に合致するから容認されるのである。S/L 交替動詞は 3 つの意味役割を義務的に取り、必然的に次のどちらかの構文に現れるが、

POUR-type: John_x sprayed paint_y onto the lawn_z; [x affects y by causing y to z]

FILL-type: John_x sprayed the lawn_z with paint_y; [x affects z by exerting force over z with y]

どちらの場合も、動詞 spray であれば、by 句は散布動作を詳細に記述した手段の意味を表す。つまり、S/L 交替動詞の場合は、動詞意味そのものが使役連鎖条件を満たしている、単純に言い換えれば、動詞意味が「力学的関係の仮説」を内在化していると言えるのである。動詞 spray の意味については前稿の (4) を参照。従って、S/L 交替動詞の手段の意味は構文拡張期における「力学的関係の仮説」とは性格を異にしている。

拡張が発生期に留まってしまう理由が形式面の特徴にあることは、奪取構文の場合と同じである。形式 [NP with NP] から、容器を満たすという FILL フレームの意味の一部を導き出すことはできない。拡張が進み得ないので、たとえ動詞が使役連鎖の手段を表わしても文は容認不可能であるし、もちろん、様態を表わす動詞も生じない。

- (4)a. *John raked the wagon with dead leaves.
 b. *John toiled/sweated the tub with hot water.
 c. *John blew/sneezed the table with black pepper.
 (5) *John sang/smoked the wagon with hay.

前稿で述べたように、S/L 交替現象を引き合いに出して、動詞の意味が構文の意味を決定するという仮説を立証することはできない。交替現象のひとつである FILL 構文は動詞の意味が中心となって形成されたものであるから、意味の優位性の議論に利用するには相応しくない構文なのである。構文発生期の構文は、全体の意味が動詞の意味によって完全に決定できるものであるから、その段階に留まって更に拡張できない構文は、ある意味で、構文としての自立性は希薄であるといって差し支えない。⁽¹⁰⁾

ところで、FILL 構文が構文発生期の構文で、よって、動詞と構文の意味が同一だとすると、こ

の構文の意味として「全体的読み (holistic reading)」が存在するという通説は、どう説明したらよ
いだろうか。全体的読みが動詞の意味から決定される意味だとは考えられないので、なぜ全体的読
みが FILL 構文に生じるのか、問題になるだろう。しかし、通説が必ずしも正しくないことは
Tenny (1994) と Jackendoff (1996) に指摘されている。

Jackendoff は全体的読みは好まれる (only favored) けれども、決して強制される (not forced)
読みではないと述べて、次の例を挙げている。全体的読みを否定する文が、but 以下に続いている。

(6) Bill sprayed/smeared/splashed the wall with paint for ten minutes, but it still wasn't covered.

(7) ?Bill loaded the truck with hay for an hour, but there was still room for more.

(8) ?Bill crammed/packed the crack with cement for five minutes, but it still wasn't full.

次の例では全体的読みが必ず存在するが、これは動詞 fill, cover の固有の意味から由来するもの
である。

(9) John filled the bottle with wine (*but it still wasn't full.).

(10) John covered the bed with blanket (*but it wasn't all covered.)

全体的読みが好まれるのは、容器が FILL 構文の直接目的語の位置にあるからである。この位置
の名詞句は、FILL 構文に限らず、一般にどの構文でも「測定 (measuring out)」の解釈を受ける。
Tenny (1994) が指摘するように、FILL 構文における容器の直接目的語は「漸増的 (incremental)」
読みと「状態変化 (change of state)」の読みで多義になっている。前者の読みが (1)-(3) の for 前置
詞句を可能にしている。この読みの場合、容器が均等に徐々に満たされていくので、最終的に必ず
全体が満たされることが保障される。後者はある状態から他の状態への変化を表し、これは定的
(definite) な状態から定的な状態への変化である。容器の容量を定的に認識するのは空一杯かの
どちらかで、中間段階は曖昧な不定量としてしか認識できないので、FILL 構文の状態変化は「空」
から「満杯」への変化を意味する。これで全体的読みが保障されるのである。spray と load の様態
動作を比較すると、spray は漸進的な読みが得られやすいので、これが (6)-(8) の容認度の差の原
因になっていると思われる。容器が満杯になるという全体的読みは動詞のフレーム意味に盛り込む
情報ではなく、一般に直接目的語に見られる漸増的読みと状態変化の読みからプラグマティックに
導かれる読みであることに注意しておく必要がある。⁽¹¹⁾

3 まとめ

以上、奪取構文と Spray/Load 構文について、拡張の三段階説に基づいて論じた。二つの構文に
共通しているのは、構文発生期に留まる構文であるということである。意味的類似性に基づいて、
構文形成の基本動詞から他の動詞群へと拡大はするが、それ以上の拡張へと進むことはない。本稿
では、その原因を構文中の動詞以外の要素が構文全体の意味に積極的に関与しているという事実
に求めた。構文発生期では動詞と構文の意味が一体化している。従って、奪取構文や Spray/Load 構

文は、動詞の意味を厳密に定義していけば、自動的に構文全体の意味が得られるものである。構文発生期のデータを処理している限り、語彙意味論と構文文法の対立はありえないのである。

注

(1) Levin の挙げている Cheat 類の動詞は、以下のとおりである。

Absolve, acquit, balk, bereave, bilk, bleed, break (of a habit), burgle, cheat, cleanse, con, cull, cure, defraud, denude, deplete, depopulate, deprive, despoil, disabuse, disarm, disencumber, dispossess, divest, drain, ease, exonerate, fleece, free, gull, milk, mulct, pardon, plunder, purge, purify, ransack, relieve, render, rid, rifle, rob, sap, strip, swindle, unburden, void, wean

(2) 動詞分類では各項目に挙げられている動詞がすべて一律の特徴を示すわけではないので、注意を要する。例えば、動詞 milk を Rob 類に含めているが、これは (6) に示したように形式 [5] にも生起することができる。動詞 unburden には除外・剥奪による被害という含意はない。

- (i) Cheap and accessible computer packages have unburdened the splitters of much donkey work. (BNC)

このような動詞の特徴を捉えるためには、さらに語彙の意味を検討し、他構文形式との関係を絡めて調査していかなければならないだろう。

(3) 動詞 cure は Free 類に入れてある。Lindstromberg (1998:204) によると、of と from の交替を許す方言があるという。

- (i) People can usually be cured from/of pneumonia.

(4) 動詞absolveとacquitは用法がやや異なる。

- (i) They absolved him of/from all responsibility for the accident. (*out of)

- (ii) The judge acquitted him of/*from the murder. (*out of)

absolve が Free 類に入ることは問題ないが、(ii) は acquit が Rob 類と同じ統語形式を取ることを示している。しかし、ここでは意味基準を優先させ、また、OED にある次のカッコ内の記述も根拠となり、acquit を Free 類に入れてある。

- (iii) 'to set free or clear from a charge or accusation; to exculpate, exonerate, declare not guilty (of, formerly from the thing charged)

(5) OED によると、動詞 deprive は古い用法では from と交替できた。

- (i) <Henry ... deprived his father from the empire> (1586)

(6) 古い用法であるが、OEDによると動詞 *rob* は二重目的語構文に現れていた。

(i) <*rob me this rich purchase*> (1613)

(7) 辞書の省略形は以下のとおり。

CDAE: Cambridge Dictionary of American English, COED: Compact Oxford English Dictionary, WOD: Webster's Online Dictionary, CALD: Cambridge Advanced Learner's Dictionary

(8) Deceive 類に入る動詞としては、他に動詞 *beguile* がある。OALD (7th edition) は動詞 *deceive* を 'to make sb believe sth that is not true' と定義するが、*cheat* の同義語であるとして 'These words all mean to make sb believe sth that is not true, especially in order to get what you want' (p.281) という説明を加え、例文 (i) を挙げている。しかし、後者の説明を動詞 *deceive* の意味とするのは不適切で、(i) の構文の意味を取り込んでしまったものと言わざるを得ない。

(i) She deceived him into handing over all his savings.

(9) One's Way 構文の「困難」の意味が、しばしば、構文のどの構成要素からも派生できない構文自体の意味として引き合いに出されることがあるが、この意味も前置詞句からある程度推測可能である。

(i) The girl elbowed her way through the crowd.

One's Way 構文に現れる前置詞句には *through*, *out of* 句が圧倒的に多い。これら前置詞句は基本的に *trajector* が *landmark* を通過するという *containment* の概念を含むが、Rudzka-Ostyn (1988)、Lee (1998) によると、この場合の *landmark* は *constraint*, *obstacle* の概念とメタフォリカルに結びついている。つまり、(i) において、群集を通り抜けることは、障害物を通ることであり、すなわち、困難を伴う行為であることは、前置詞句の意味から派生できるのである。

上の議論と突き詰めると、「構文の意味」は結局、要素の意味の複合に帰することができるということになるが、この可能性と構文文法の主張との関係については稿を改めて論じたい。

(10) 構文に現れる前置詞が動詞の意味によって規定されることは、S/L 交替動詞とよく似た動詞 *wrap* を見れば分かる (Pinker 1989、岩田2001参照)。この動詞は次の三通りの交替形を持つ。

(i)a. He wrapped shiny paper around a present.

b. He wrapped a present with paper.

c. He wrapped a present in paper.

(a) と (b) がそれぞれ POUR frame、FILL frame に対応する現象とみてよいが、問題は (a) の前置詞 *around* である。*wrap* のフレーム意味について、Pinker (1989:127) は "Its absolute minimum

requirement is that a flexible object conform to part of the shape of an object along two or more orthogonal dimensions.”と述べている。つまり、品物全体をすっぽり覆い尽くすことが wrap の意味である。これが前置詞 around の選択に関与している。(c) の前置詞 in についても同様である。ただし、(b) と (c) は構文が異なるので、同じ構文で with と in が交替すると考えるべきではない。(c) の in 句は場所を表わしているので、(c) は John put the present in a box. のような使役構文のひとつと考えたほうがよい。

(11) この点では、前稿の (4c) は spray の意味から除外すべきである。

参考文献

- Goldberg, A. (1995) *Constructions: A Construction Approach to Argument Structure*. University of Chicago Press
- 岩田 彩志 (2001) 構文文法の可能性. 「言語」30巻2号、73-79.
- Jackendoff, R. (1996) The proper treatment of measuring out, telicity, and perhaps even quantification. *NLLT* 14, 305-354.
- Lee, D. (1998) A tour through through. *Journal of English Linguistics*, 26-4, 333-351.
- Levin, B. (1993) *English Verb Classes and Alternations*. University of Chicago Press.
- Lindstromberg, S. (1998) *English Prepositions Explained*. John Benjamins.
- Pinker, S (1984) *Language Learnability and Language Development*. Harvard University Press.
- _____. (1989) *Learnability and Cognition: The Acquisition of Argument Structure*. The MIT Press.
- Rudzka-Ostyn, B. (1988) Semantic extensions into the domain of verbal communication. In *Topics in Cognitive Linguistics*, edited by B. Rudzka-Ostyn, 507-554, John Benjamins.
- Tenny, C. (1994) *Aspectual Roles and the Syntax-Semantics Interface*. Kluwer Academic Pub.
- Tyler, A. and Evans, V. (2003) *The Semantics of English Prepositions*. Cambridge University Press.
- [邦訳『英語前置詞の意味論』(国広哲弥 (監訳)、木村哲也 (翻訳)、研究社、2005年)]